

2. 教員共同研究報告(研究会費)

RESASを用いた地域戦略策定の研究 —地域をフィールドとした教育の在り方の検討—

代表研究者：山部 洋幸

共同研究者：小松原 尚、下山 朗

1. はじめに

地域経済の活性化において、地域経済に関する統計を正確に把握することは、地域の創生および戦略の策定において重要な取り組みとして求められる。その中で経済産業省において自治体による地方創生の取り組みを情報面から支援するため内閣官房における、まち・ひと・しごと創生本部事務局と連携し、政府による地域分析に資する統計情報、システムの提供が行われている。この取り組みはRESAS（地域経済分析システム）として提供をはじめ、いわゆるビッグデータを活用した政策立案等に資する目的として行われている。

RESASは地方自治体の政策立案のための基礎資料として用いられ始めているが、その活用はそれだけにとどまらず教育の現場においても利用されている。そこで本報告では、RESASを用いた地域の戦略策定に学生教育においてどのように活用するのか、探索的に検討していく。本報告の構成は以下のとおりである。第1にRESASの教育面における活用の現況について簡潔に述べる。第2に学生のRESASのマップの利用状況を明らかにすることで学生が利用するマップの傾向を読みとぎ、RESASにどのような認識を抱くのか明らかにする。第3にRESASにおける教育的な活用を考察し、今後の課題を提示し、結びとする。

2. RESASの大学教育における利用について

RESASは地域経済分析システムと呼ばれ、地方創生の様々な取り組みを情報面から支援するために、経済産業省と内閣官房（まち・ひと・しごと創生本部事務局）が提供しているものである。

その大学教育面における利用¹では、金沢大学と山口大学が紹介されている。金沢大学では全8回の講義で各マップの利用を説明し、地域のことを調べ、グループワークを実施している。評価として学習を通じて、地域への愛着、地域課題解決人材の育成、調査から報告までの一連のリテラシーが身についたと報告している。山口大学では、RESASコンテストへの参加を目標とし、学生な自主的な取り組みを重視した活動を行っている。地域への愛着、課題の発見、課題の解決といった面において向上がみられたと述べている。

研究調査報告として、下山(2016)はRESASを用いて課題解決型プロジェクトの参加を通じて、教育的な取り組みにおける成果を報告している。下山によれば、論理的思考力、分析力、プレゼンテーション能力について有用である旨を述べている。

そこで本報告では学生がRESASを用いることで得られる地域への深い理解と新たな発

¹ RESAS ウェブサイトを参考にした。

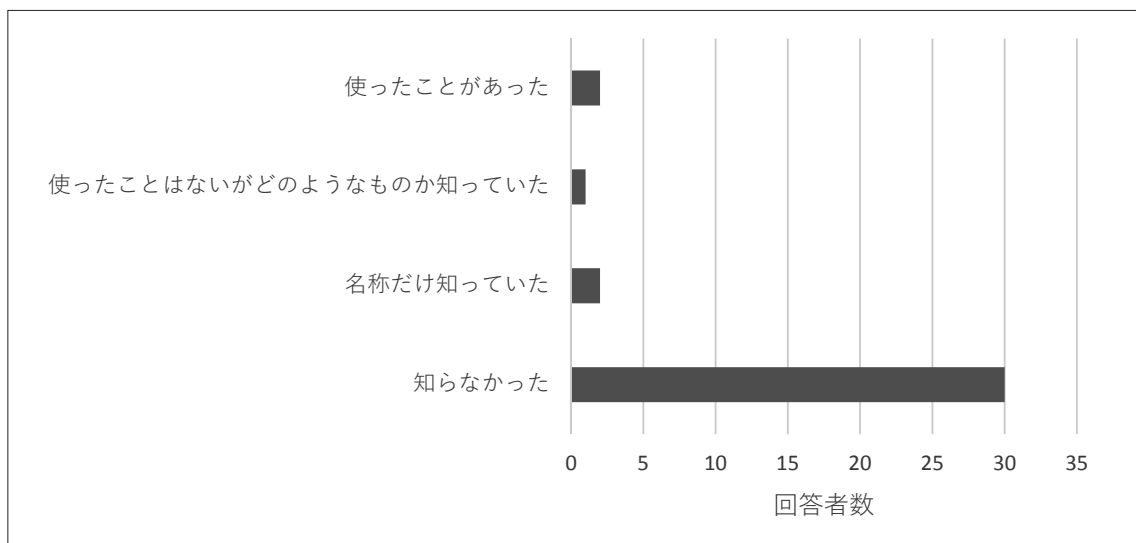
見という二つの点に着目し、学生がどのようにRESASをとらえているのかアンケート調査を実施し、探索的に明らかにしていく。

3.1 アンケート調査概要

本稿で用いるデータは、本学における学生35人から得られたものである。サンプル数は35名である。性別は男性が11人(31.4%)、女性が24人(68.6%)であり、年齢は19歳から21歳で、大学2年次の学生である。調査は2017年7月25日に実施し、回収については直接行った。収集されたデータの一部を分析に使用している。

3.2 結果

はじめにRESASの認知の状況を調査した。



図表1 RESASの認知

図表1のRESASの認知について質問項目は「授業前からRESASのことは知っていましたか」という問いに対して、「使ったことがあった(2人)」、「使ったことはないがどのようなものか知っていた(1人)」、「名称だけ知っていた(2人)」、「知らなかった(30人)」の結果から、ほとんどの学生が初見に近いといえる。

授業において、学生はどのように用いたのか。アンケート結果より明らかにしていく。

授業における課題は「地域経済活性化のアイデアを提案しなさい」というものである。対象となる地域の設定、対象となる地域の課題の発見、対象となる地域における打ち手の提案という流れで実施していった。

図表2では学生が政策提案を考える上で実際に使用したマップの記述統計量を示している。詳細を見ていくと、観光マップの利用状況において平均が4.20であり、次に人口マップが3.29、続いて産業構造マップが3.15と続く。一方で企業活動が1.88、財政1.77、雇用医療福祉1.66であり、今回の授業の課題設定も影響していると考えられるが、ほとんど使用されていない状況であった。

図表2 実際に使用したマップにおける記述統計量

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
観光	1	5	4.2	1.324
人口	1	5	3.29	1.506
産業構造	1	5	3.15	1.635
まちづくり	1	5	2.86	1.611
経済循環	1	5	2.4	1.499
企業活動	1	4	1.88	1.038
財政	1	5	1.77	1.262
雇用医療福祉	1	4	1.66	0.968

出所：筆者作成。有効なケース数33

次に本学学生へのアンケートからRESASと教育の関連性を明らかにしていく。図表3では、「RESASが優れていると感じた点について5から1で最も近いものを選択してください」という設問で回答してもらった。本設問は地域への理解および新たな発見の点から設問を設定している。記述統計の詳細を見ていくと、「資料作成の役に立つ」(4.29)、「地域研究の役に立つ」(4.21)、実用的な面として高い数値を示していることがわかる。

図表3 RESASが優れていると感じた点についての記述統計量

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
資料作成の役に立つ	3	5	4.29	0.676
地域研究の役に立つ	3	5	4.21	0.538
新しい発見がある	2	5	3.97	0.87
地域の実情を知ることができる	2	5	3.94	0.649
多角的な視点で物事を考えられる	2	5	3.94	0.919
視野が広がる	2	5	3.88	0.844
政策提案に有用である	2	5	3.82	0.716
使えるデータがそろっている	2	5	3.76	0.855

出所：筆者作成。有効なケース数34

「RESASが優れていると感じた点について5から1で最も近いものを選択してください」という設問に因子分析を実施した(図表4)。第1因子は「地域の実情を知ることができる」、「使えるデータがそろっている」といった地域のデータ面に関する項目が高い因子負荷を示しており、地域知るための道具としての機能に関連した内容の項目群といえよう。よって、この因子を「地域把握ツール」と命名する。続く第2因子では「視野が広がる」「多角的な視点で物事を考えられる」といった学生からみるとRESASを用いることは様々な視点を提供している項目群であるといえる。よって、この因子を「多様な視点」と命名する。

図表4 大学生の視点から見たRESASの優位性に関する因子分析

	第1因子 地域把握ツール	第2因子 多様な視点	共通性
地域の実情を知ることができる	<u>0.838</u>	0.073	0.707
地域研究の役に立つ	<u>0.774</u>	0.15	0.621
使えるデータがそろっている	<u>0.7</u>	0.272	0.564
資料作成の役に立つ	<u>0.533</u>	0.211	0.329
視野が広がる	0.1	<u>0.804</u>	0.657
多角的な視点で物事を考えられる	0.099	<u>0.751</u>	0.574
新しい発見がある	0.305	<u>0.675</u>	0.549
政策提案に有用である	0.39	<u>0.526</u>	0.429
因子寄与	2.34	2.09	4.43
累積寄与率(%)	29.252	55.379	
信頼性係数(クロンバックの α)	0.81	0.811	

※主因子法バリマックス回転後

※※下線はそれぞれの因子に高い負荷量を示していることを表している。

以上のような因子分析結果を踏まえ、 α 係数を用いて信頼性を測定したところ、「地域把握ツール」は0.81で「多様な視点」においても0.81であり、両方とも0.8を超えており、十分に高いことが明らかである。

導き出された2つの因子と授業感想および地域への関心について相関分析を行った(図表5)。

図表5 RESASに関する相関分析

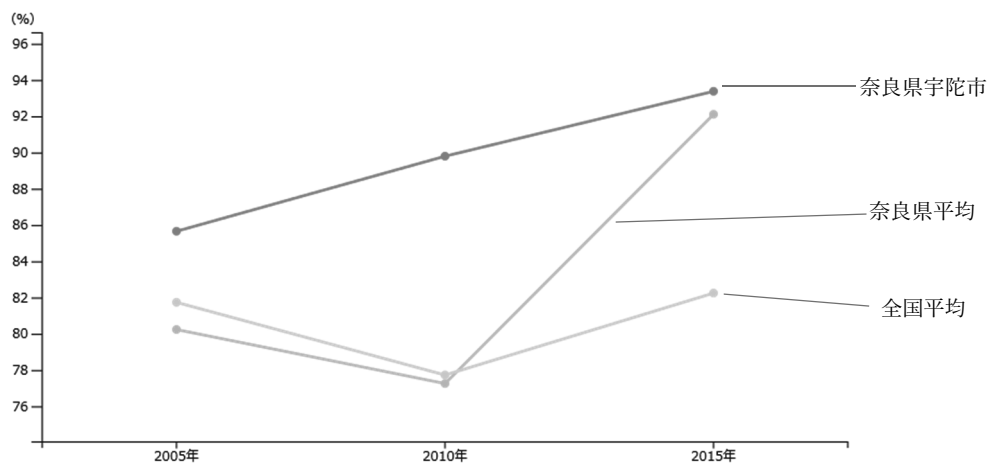
	地域把握ツール	多様な視点	授業感想	地域関心
地域把握ツール	—	.356*	.380*	-0.069
多様な視点	.356*	—	0.126	0.065
授業感想	.380*	0.126	—	0.245
地域関心	-0.069	0.065	0.245	—

* : $p < 0.05$

図表5における授業感想の質問項目は「RESASを活用した授業の感想をお聞かせください」と尋ね、「1.よくなかった」、「2.あまりよくなかった」、「3.普通」、「4.よかった」、「5.とてもよかった」の5段階で回答している。地域関心の質問項目は「自分自身は地域のことに関心がある」と尋ね、「1.全くない」、「2.あまりない」、「3.普通」、「4.まあまあある」、「5.とてもある」の5段階で回答している。

相関分析の結果をみると、「授業感想」と「地域把握ツール」に相関がみられる。これは、授業を通じてRESASに興味またはよい印象を抱いた人は、ツールを用いて地域について

知ることに関心があるといえる。また、「地域把握ツール」と「多様な視点」は相関がみられ、これはRESASというツールが学生自身に新たな視点を提供している可能性がある。一方で、「地域関心」の項目はいずれも相関がみられない。自由記述欄を見ると「RESASより地域のHPの方が詳しいので、他地域との比較にRESASは使いやすいと感じた」といった意見がみられることから、比較といった分析および地域の理解は優れているが、特定の地域について関心があり、より深く理解したい人であれば、RESASの情報だけでは不十分と感じており、相関がみられない結果が現れたのかもしれない。より深く地域を理解するには、RESASのガイドラインでも示されているようにインタビュー調査等の質的調査もくみあわせて把握する必要があるといえる。例えば、今回一人の学生が、実際にRESASとインタビュー調査を実施した。対象は奈良県宇陀市の林業である。



図表6 宇陀市における林業作業実施率²

学生は事前にRESASで対象地域のデータを調べ、インタビュー項目を作成した上で、宇陀市菟田野まちづくり協議会の企画である「うたの魅力発見体験ツアー」に参加した。そこで林業関係者の方にインタビューを実施した。インタビュー項目の一つは「宇陀市は林業作業実施率が93.41%と全国平均より高く伸び続けているが何か要因や努力はあるのか」というものである。それに対する答えとして「宇陀市は山林の近くにも人里があること、手入れをすることが当たり前という考えが根付いており、手入れをしないと恥ずかしいとさえ思うくらいの感覚がある」との回答を得た。これらを通じて明らかなことは、統計データ（図表6）だけでは分からない産業従事者の心情面の部分も把握できているといえる。

4. 結びにかえて

本稿では、学生がRESASを用いることで得られる地域への深い理解と新たな発見という二つの点に着目し、学生がどのようにRESASをとらえているのかアンケート調査を実施した。明らかになったことは、RESASというツールが地域のことを知る上で有用であり、比較して分析することが、奈良県立大学の学生に限っていえば新たな視点を提供している

² 林業作業実施率 = (過去5年間に保有山林で林業作業を行った経営体数) ÷ (経営体数総数)。

図表6の出所はRESASのウェブサイトにおける産業マップを参考に筆者作成。

可能性があることであった。

一方で、特定地域をより深く知るにはそのほかの質的調査も別途検討する必要があることが示唆された。今後は質的調査も設計に入れた教育プログラムおよび仮説構築が求められるといえる。

参考文献

下山朗 (2016)「学生教育における地域経済分析システム (RESAS) 活用の課題とあり方」『釧路公立大学地域研究』第25号, pp.69-79,

RESAS 地域経済分析システムウェブサイト

(<https://resas.go.jp/#/29/29212>) (最終閲覧日 2018年1月29日)